

中京大学理工系のパワーアップ  
——next 中京大学理工系四半世紀に向けて——

工学部教授・中京大学人工知能高等研究所長  
興水 大和



中京大学理工系の学部と大学院で育った学生の先には社会が、特に産業社会が待っている。この産業社会からの高い評価と信頼感を彼らはどうしても勝ち取らなければならない。その力の源は、学生・院生自身が身に着けた実力と魅力の意味からパワーアップを培うことに尽きるので、教員はそのためにできることは何でも、それも全力でやってあげなければならない。そして、一步一步の歴史にその成果を次代に向けて積み重ねていかなければならない。本小考は、教育カリキュラムを充実して基礎教育を地道に続けることとの併せ技で、その効果は絶大ではないであろうか。

**格闘する舞台とそのパワーアップ**

その学生たちと教育研究の現場に身をおく教員は、社会と世界に向かって「声に出して言える」格闘するテーマをどうしても堅持し磨き上げていかなければならない。もしこれを失ったときの研究は、したがって教育はひどく色あせる。この意味で、教育研究環境を教職員自らの力で自らを活性化しなければならない。“研究に裏打ちされた教育”、“教育に励まされた研究”の実装とそのパワーアップが強く期待されるのである。私ども人工知能高等研究所は、もちろん、そのためには欠かせない重要なインフラである。

**①パワーアップの手掛かり（資金）**

産業界からの共同研究費、委託研究費や寄付金を受け入れることに消極的であってはならない。よき研究資金・環境はよい教育に欠かせない。研究室をOJTの場として本気で学生と格闘するところに教育の出発点があるからである。よき研究と教育のあるところに研究教育の資金は黙っていても集まり、この資金に支えられた研究教育成果がまた向上する、そんな好循環が生まれる。これと同時に、科研費などの公的教育研究資金の獲得は忘れてはならない。学術界における大学・教員のパワーの証左であるからである。

**②社会人的交流パワーアップの手掛かり（生きた就活）**

見逃せないことであるが、研究室の院生・学生にとって産学協同研究の場は、自動的なインターンシップ・実践的就活の場になっている。ゼミとか研究室の質的パワーアップに欠かせない。その証拠は、それは企業側こそがそのように密かに、しかしつよく期待しているからである。

**③学術パワーアップの手掛かり（学会デビュー）**

学会活動への学生・院生の参画は、一人前の学術社会人、産業社会人になるための序章としてこの上ない舞台である。学術技術の交流、サロン、社交の素養は学会において確実にパワーアップできることが約束できる。研究室、ゼミ活動はそこに向かってのインキュベータであるので、研究室の充実は学生の学会活動の充実を約束してくれる。

**学術力パワーアップのために**

学術研究、技術開発研究の成果は、論文執筆、学会発表、国際会議発表によってその実力と効力がやっ

\* 著者近影は朝日新聞社ご提供によるものです

と分かり、我に返ると、そのためには基礎力がいよいよ大切であることを改めて教えてくれる。その成果が蓄積されて学位の称号を受けることがもたらす価値と意義は疑う余地はない。

論文執筆も学位取得も、技術開発系の就活では常に大きなパワーとなるし、大学教員を目指すキャリアアップには、言うまでもなくこれらがなくては何も始まらない。

人工知能高等研究所の機関紙「IASAI ニュース」にこれらの活動の蓄積が記録されている。本格的理工系の体制が整った四半世紀記念の今となって、もちろん十分ではないがこれらを跳躍台にして今後を起爆すべきよき時を迎えている。

例えば、(専ら情報系ジャンルに限って) この四半世紀の期間で博士学位取得者が約2名/年のペースで累計30名を越えてきていて、さらにその中から、大学と研究機関などにて研究教育現場で活躍している卒業生が20名を越えてきた。これらはいかにもささやかな実績かもしれないが今後への発奮を助けてくれて余りある気がする。

### **技術力パワーアップのために**

学術力は産業社会に届く技術力を生み出して初めて本物なので、技術力もアピールしなければならない。一つの目安は、大学発の特許取得も見逃せなく、ここでは特許収入に期待するのではなくて産業界からの“技術力による信頼収入”は期待しなければならない。中京大学理工系四半世紀の歴史は浅いが、僅かではあるが最近の30数件(2000年以降のみ、特許申請～特許取得)の実績から背中を押されて前向きに踏み出したい。

また、特許取得に関わった学生にとってはモチベーションアップ、間接的ながら技術力キャリアアップにつながる。また、学術賞や技術賞は技術力の指標であって、産業界からの注目度は測りきれない。忘れがちであるが、学会やシンポジウムなどの運営や発展にアクティブにかかわることは、実は非常に重要であろう。

さらに、時にテレビや新聞のメディアからの注目も技術力アピールの格好の手掛かりである。これも忘れがちであるが、メディアを軽視せずにむしろ丁寧に対応し、自らの技術力の存在感を大いにアピールすることを期待したい。

中京大学理工系の次代に向けて、“自覚した策”も練らずに漫然と進むか、目指すところを素描しながら、“徹底した戦略”のもとで進むか、いまその岐路に立っている。本稿は後者のためのパワーアップの手掛かりを探ろうと考えた、私的メモのようなものである。このようなメモを持ち寄って、熱い議論と実践を今日から始めたいと考える。

### **文献**

中京大学人工知能高等研究所 HP <http://www.iasai.sist.chukyo-u.ac.jp/>